

まなびと



このたびの東日本大震災により
被害を受けられました方々に、
謹んでお見舞いを申し上げます。
教育出版株式会社



もくじ

2011年6月に植樹祭が行われた岩手県一関市室根町の矢越山ひこぼえの森

特集 大規模災害への対応・防災を考える

大災害に学び、教訓を生かす新たな防災教育の確立を……………	2
災害を受けた子どもたちの心のケア ～これからの長期的支援の必要性～ ……	6
津波防災劇を通した防災教育に取り組んで……………	8
編集部からのお知らせ……………	10

大災害に学び、教訓を生かす 新たな防災教育の確立を

NPO 法人「神戸の絆 2005」理事、神戸市教育委員会スーパーアドバイザー おおはま よしひろ
大濱 義弘

はじめに

未曾有の大災害、阪神・淡路大震災と東日本大震災。東日本大震災は、震災後 16 年を迎えた神戸で震災の風化が叫ばれ、歯がゆい思いをしていたとき、唐突に発生した。私にとっては、まさに「災害は忘れた頃にやってくる」を地でいく瞳目すべきできごとであった。

二つの災害の共通点は、死者・行方不明者の数には大きな隔たりがあるが、ともに甚大な被害をもたらしたことである。

相違点は、今回の東日本大震災には、大津波の発生と原発事故という大災害が複合していることであろう。阪神・淡路大震災は「線の被害」、今回の東日本大震災は「面の被害」- 広域災害 - という専門家もいる。

また、その発生のメカニズムからいえば、阪神・淡路大震災は活断層が動いた直下型地震であり、今回の東日本大震災は千年に一度といわれるプレート型の巨大地震により発生した津波による被害が圧倒的である。

これらの災害を学校現場で生かし、「何を」「どう教え」「どのように備えるのか」ということについて、私見を述べてみたい。

1 阪神・淡路大震災を語り継ぐ中で

私は、平成 7 年 1 月 17 日に発生した阪神・淡路大震災のとき、神戸市北区の小学校の新任 1 年目の校長であった。幸いにも、その学校は新設 3 年目の新しい学校であり、被害の比較的軽微な地域にあったため、児童、保護者、地域に大きな被害は見られなかった。

しかし、この年の 4 月 1 日付で、神戸市中央区の避難所となっている学校に転勤を命じられ、数多くの貴重な体験と教訓を得た。

平成 16 年 3 月末で定年退職し、その後は神戸市教育委員会の嘱託職員の立場や、NPO 法人「神戸の絆 2005」の語り部として、震災の体験や教訓を各地でお話ししてきた。この活動は、今も継続している。

まず、私が語ってきたことについて、その概要を紹介したい。概要とあえて言うのは、伝えてきた相手が、小学生から高校生に至る児童生徒とその保護者、地域の防災リーダー、教職員など、非常に多岐にわたるためである。

2 私の語り伝えてきたこと

相手の心に届くように経験を伝えるには、当時の映像や声、そして実際に書かれた文章等の資料が不可欠である。また、正確な数字等も、説得力をもたせるには大切な要素となる。

私は、できるだけ震災当時の様子をリアルに語り、事実を通して震災から学んでほしいという思いで、自分自身の体験や神戸で起こっていたことを語ってきた。映像は、阪神・淡路大震災の実際の映像をコンパクトに編集した「ビジュアル版幸せ運ぼう」を使用した。これは、防災教材として神戸市の学校にはすべて備えられているものである。

1) 大災害では何が起き、人はどう動くのか

●余震の恐怖

余震の恐怖に怯えながら、寒さに震えつつ屋外で過ごした。本震以上の揺れは来ないことや、余震が多く発生するほどエネルギーの放出が進み、地震は収まっていくことを知らなかった自分の無知を思い知らされる。着のみ着のまま屋外に出て震えているとき、近所のご老人が、わずかな食べ物に分けて下さった。今まで話もしたことなかった人と励まし合い、恐怖に耐えた。

●生き埋め



倒壊した家屋に多くの人が取り残された。生き埋めになった人は、約3万5千人という記録がある。そして、その約80%の人が「近所の人」に助けられた。ここに地域の絆の大切さを見出す。震災後に導き出されたキーワードは「命・絆・助け合い」であった。

●火災の恐怖

火災によって亡くなった人々が多くあったこと、手をこまねくしかなかった、周りの人々の苦悩や悔しさ。10年以上経っても、当時消防士であった人々の中には、その苦悩のため、震災の状況を語れない人が多くいた。この震災による死者の85%は圧死、12%は焼死である。

●ライフラインの途絶

電気、ガス、水道、通信、道路網等の寸断、断絶による、未だかつて経験したことのない極限の状態。電気やガスが停止しても、代替のものである程度耐えることができる。しかし、大都市のコンクリートやアスファルトで固められた場所でもっとも困ったことは「トイレ」であった。水の出ない水洗便所は何の役にも立たないものとなった。通信も、地震直後は電話が通じたもののすぐに不通となり、職場、同僚、親戚縁者との安否確認はまったくできなくなった。道路網の寸断と、災害関係車両優先のため、私は恥ずかしながら、自分が校長を務める学校に2日間行くことができなかった（幸い当時の教頭先生が学校に近く、いち早く出勤して異常のないことを、まだ電話が通じている時間帯に連絡してくれていた）。

いまひとつ、私は2日間の避難所生活の後、一部損壊で済んだ自宅に戻ったが、ラジオ以外の通信手段はない状態で、神戸の市街地が実際にどのような被害状況かはまったく分からなかった。

●避難所

教職員の到着を待たずに学校が避難所として機能

し始めた箇所が多数あった。神戸の学校は「学校施設開放」が地域社会に定着しており、地域の方々の代表に学校の鍵の一部をお預けしていたが、この大震災では、このことが大きく機能した。一部には、校舎の鍵を壊して中に入ったり、避難によい場所を奪い合ったりしたということもあったと聞くと、総体には節度ある避難がなされた。

学校避難所には、数々のドラマやエピソードが生まれた。

●トイレパニック

生徒数千人ほどの学校に3千人を超える人々が避難した。水の出ない水洗トイレはすぐに「てんこ盛り」状態になってしまう。当初、その始末をしたのは、不眠不休で避難所を支えた教職員であった。さらに、中学生たちの勇気ある行動—バケツに便を掻きだし取って穴を掘り埋める、プールに残っていた水で流すという活動—が、「希望を失い放心状態」の大人たちの萎えた気持ちを勇気づけ喚起した。

●先生たちの頑張り

被害の大きかった地域の学校に勤める先生方の献身的な避難所運営にも、多くの人間ドラマがあった。12時間かけて出勤し、その後何日も「学校へ泊り込み」状態になった校長先生や教頭先生、そして教職員の数は数え切れないほどである。

この中には、「自らも被災者」でありながら止むに止まらず、避難している方々の世話をし、子どもたちの安否確認に奔走する「尊い教師の姿」があった。私は、この方々にたとえ一時でも自宅に帰っていただくために「宿直」を引き受けることくらいしかできなかった。今思えばもっとできることがあったかもしれないと、忸怩たる思いである。

●ボランティアの活躍

震災当時、神戸に駆けつけてくださったボランティアの数はおよそ150万人と言われている。現在の神戸市の人口に匹敵する数である。後に『ボランティア元年』と言われることになるが、若者たちの合言葉は「君は神戸へ行ったか」だったと聞き、今も胸の熱くなる思いである。

希望を失い暗澹たる思いに沈む被災者たちに明るく元気に声をかけ、その「元気を出して一緒にやりましょう」という言葉がどれだけの力を与えたことか。まさに無私の行為の美しさ、人間のもつ優しさや思いやりの素晴らしさを思い知らされたことであった。

一方、人間の「醜さ」もまったくなかったわけではない。住む家を失ったり、身内の大切な人を失ったりした人々が大勢出た状況の中であり、致し方ないという思いもあるが、辛いことでもあった。その中で、抑制の効いた穏やかな感謝の言葉に胸を打たれたこともしばしばあった。

2) 心のケア

大災害が発生したとき、それを「体験した人」や「避難所運営や救助活動に当たった人」等には、深刻な心身症状が起こる。

●子どもの心のケア

子どもの心の傷やトラウマ（心的外傷）体験は、心身に重篤な症状を発する。頭痛・嘔吐・脱毛・不安・落ち込み・怒り・拒食・過食・退行・睡眠障害などである。

これらの症状は、都市の再生と同じような歩調では進まないし、一度は吐き出して落ち着いても、繰り返し現れる。さらに、親のトラウマ（経済的困窮や人間関係のひずみ）からの被害を受けることも多い。教師や関係者には、「思いやりの心や子どもの発するサインに気付く力量」、「長期的な取り組みの姿勢」、「専門家に相談できるシステム作り」が求められる。精神科医の巡回相談など非常に有効であった。

●教職員の心のケア

1月17日の大震災発生時から、避難所になった小学校で献身的に努力し、7月末に自殺したある教頭がいる。直接の原因は、子どもの起こした校外でのトラブルを巡る保護者との軋轢と言われているが、避難所運営と学校運営、トラブルの処理、周囲の理解度の低さ、と言う輻輳した要因があったことは間違いない。PTSD（心的外傷後ストレス障害）を発症していたとも考えられる。

このほか、急激なエネルギー消耗によるバーン

アウト（燃え尽き症候群）で意欲が低下し、抑うつ症状から休職へという事例も多く見られた。前述の教頭の例と同様、「孤立させないこと」や「職務を分担し合う」など、職員の情報共有や連携・協力体制が不可欠である。

3) 震災の風化が叫ばれ始めて

今から6年ほど前、「震災10年神戸からの発信」というイベントが始まったころから、神戸市民の中の三分の一もの人々が阪神・淡路大震災を知らないという事実と直面し、私は、震災の語りについて軌道修正を迫られることになった。それは、震災当時の過酷な状況に加え、どう備えればよいのかについてもっと具体的に知りたいという、聞く側の要求の変化などからである。

この中で私が得た結論は二つである。

■未来につなぐ防災教育の構築の必要性

震災を「過酷な体験をした」という一面からのみで伝えるのではなく、あの体験から導き出されたことや教訓として生きていることを語る。そして、これから先をどう生きるのかなど、減災への方向性を語り、希望を語ることである。

■新しい研究成果・知見に学び伝えること

防災の科学的研究や地域防災の取り組みは時々刻々と進化している。これらの学習・理解なくして震災・防災は語れない。

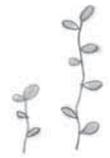
3 未来につなぐ防災教育の確立を

新たな防災教育の構築に向けて求められることは、避難訓練のみの単なる「安全教育」としての防災教育から、「人間としてのあり方・生き方」をめぐる課題、「人間教育としての防災教育」へのシフトである。

貴重な体験を語り継ぎ、風化させないために、「命・絆・助け合い」、「被災者の思いを理解し共有化する」という基本理念のもとに、副読本の作成等も視野に入れた取り組みがぜひとも必要である。

●防災教育の基本にすること

「自分の命は自分で守る知識・技能を身につける」ことと、「家族の絆や仲間との助け合いの大



切さを学ぶ」ことの二点を踏まえ、次のような取り組みが考えられる。

- ①子どもの心に響く「防災学習」の推進—防災・減災の知識、技能、態度—各校での年間カリキュラムの編成と実践
- ②防災から減災へという視点と新たな防災課題（「防災マニュアルと防災カリキュラム」の点検・改善）への対応
- ③家庭・地域・防災関係機関等との連携・協力による新たな「防災訓練」と地域防災力の向上

●これからの防災教育の課題

- ①新たな災害等に学ぶ現地体験の重視（ボランティアなど）
- ②研修成果、新たな知見の共有
- ③命の大切さへの認識（自殺者が13年連続3万人を超えるというこの国のもう一つの課題への対峙）
- ④すぐれた教材の発掘と指導者育成
震災を知らない若い教師たちへの支援

4 新しい知見・研究成果に学ぶこと

1) 防災から「減災」というシフト

危機分散の考え方の広がり

2) 災害心理の克服

正常化の偏見（自分にとって都合の悪い情報を無視したり、過小評価したりする心理）の排除

3) 生活防災の重要性

知識と知恵の共有と地域コミュニティの育成

4) 自助・共助・公助の精神の醸成

「自助」：家族の絆、住宅の耐震化、備蓄、避難経路の確認等

「共助」：コミュニティでの日頃の連携、災害時要援護者への支援体制等

「公助」：指導者育成、共済制度の創設等

5) 教訓として得た危機管理の要諦

行動指針

●ハーバード三則（*1）

オープンマインド……情報公開・共有

テンダーマインド……現場重視、市民目線の優しさ、支援

タフマインド……生き残るための強い意志

●危機管理行動の四原則

①迅速な行動《Speed》

トップダウン、優先順位に基づく意思決定

②具体的な対処《Object》

「学校はいつ再開」、「避難所の解消はいつ」等
具体的指示

③情報共有《Communication》

情報収集・共有・発信

④組織的行動《Organization》

組織力結集

6) 「防災拠点」としての学校

大災害の発生時には必ず学校が登場する。学校には、地域社会にはない広い空間（運動場・教室）がある。いったん災害が起これば、さまざまな機能をもたせることのできる場である。好むと好まざるとにかかわらず、市民の命と暮らしを支える場として提供されなければならない。

この覚悟を教職員は常にもつべきであり、また、備蓄の基地としての機能も普段から整えるよう、地域や行政機関との連携を深めておかななくてはならない。

おわりに

3月11日に大震災が発生し、その後すぐの4月から新教育課程が全面実施されている。学校現場では、おそらく自校の防災教育の「更なる推進」や「カリキュラムの見直し」等が行われていることだろう。

防災教育は、「命の大切さ—命を守り・育て・養うこと」を、「具体的な知識・技能を生きて働く力として」教え、そのための「備えを地域の実態に合わせてできる実践的態度」として獲得させることであろう。そのためには、過去の災害に深く学び新たな知見に学ぶ姿勢こそが求められる。

東日本の一日も早い復旧・復興を願いつつ、今回の体験が教訓として生かされる日が来ることを信じている。

（*1）世界をリードする指導者の心得として、古くからハーバード大学や大学のある地域で語り継がれている教え。

災害を受けた子どもたちの心のケア ～これからの長期的支援の必要性～

東京学芸大学 教育実践研究支援センター・教職大学院教授 こばやし まさゆき 小林 正幸



1 大震災後に開始したWebによる支援

今回の大災害によって、心に影響を受けた子どもは大勢いる。筆者は、震災後の一週間で、子どもたちの心のケアに携わる教師・支援者に向けた後方情報支援サイトを立ち上げた。Web上のホームページ〈<http://for-supporters.net/>〉とFacebook〈<https://www.facebook.com/cocorocare>〉を用いての展開である。ここでは、教師・支援者に向けた「電子メール相談」、今回の災害の特徴に合わせた子どもたちの心のケアの理解やその指導に特化した「コラム」による情報提供、そして、支援者向け、保護者向け「各種リンク集」を作成・提供してきた。ホームページのページビューは毎月10万回、Facebookも15万回に及んだ。

夏には、「世界一心の温まるキャンプを福島県でやりたい」とのキャッチコピーのもと、原発事故災害で地元に住めなくなった子どもたちのために、福島の裏磐梯で仲間と再会する「みどりの東北元気キャンプ」を企画・推進した。参加した子どもは、2回の実施で180名を超えた。このキャンプは全て募金によって運営され、今後も数年にわたり継続していく〈<http://cocoro-care.net/>〉。

2 今回の大災害の特徴

まず、今回の大災害の特徴を整理しておこう。第一に、この災害が子どもたちの心に及ぼした影響が広範囲に及んだことがある。例えば、海外に住む邦人から、幼稚園年齢の子どもが「津波遊び」を始めたとの相談が寄せられた。震災後二週間以内の時期であった。遠く日本から送られてくる地震や津波の映像に加え、それを眺める大人たちの不安な表情、深刻な顔が脅威となり、揺れを感じなかった地域でもこの遊びが流行したのである。このことから、いかに広範囲の子どもたちに影響を与えたかが分かる。

第二に、今回の災害はさまざまなものが複合的に起きたということがある。大地震、大津波、原子力発電所事故による放射線災害、そして、それに伴う風評被害や人権侵害問題である。それらの災害にはそれぞれの特徴があり、その被害の及び方は、地域、個人によってさまざまである。

災害が終息するのに大変な時間を要することも大きな特徴である。放射線災害も風評被害も未だに終息をしておらず、避難指示の解除の見通しも立っていない。激甚災害地区の復旧も遅々として進まない。これが第三の特徴である。

3 被災の体験と子どものストレス症状

通常、子どもは情報処理能力が高い。PTSD（心的外傷後ストレス障害）のような症状の出現は大人よりも早い。ストレス反応も早めに出る。こうした症状は、安心感・安全感があれば、周囲に比較的分かりやすい形で表面化する。その段階で、周囲が適切に関わりさえすれば、多くの場合、先々での問題は起きない。しかし、安心感・安全感が確保されなければ、症状は表面化しにくい。今回の災害では、福島県を始め多くの被災地域で、安心感・安全感が確保されず、ストレスが積み上がり続けている。そのため、問題が潜行し、症状が本格化するのには、先の話になっている。

震災から半年がたとうとしている今の段階で、被災地の子どもたちには、極端に「静かで良い子」か「元気過ぎる姿」が目立つ。これらも、強いストレスに曝されていることを示す症状である。しかし、周囲の大人や教師の多くは、そのことに気づいていない。「静かだから落ち着いている」「元気だから良い」と考えている。この段階で周囲がこれを課題としてとらえ、適切に関われば、先々での深刻な問題を避けることができる。

このままの状態が続くと、先々、PTSDを始め、問題行動へと発展していくことが強く懸念さ

れる。それを未然に防ぎたいというのが筆者の願いであり、実践展開である。

4 学校での学習がもっている意味

では、学習活動や学習環境でどのような配慮や工夫が必要なのだろうか。

1) 安全・安心の確保

学校は、子どもが自分の成長と仲間の支えを感じられる場である。教師が安全・安心を約束する場である。心のケアは、安全・安心が確保されて初めて、本格的にスタートを切ることができる。

安心・安全とは、災害前の生活の時間が回復し、かつてのように時間が流れていくこと、平凡な日常が復活することに尽きる。その象徴が、子どもにとっては学校であり、大人にとっては仕事の再開である。子どもにより安心を与えるのは、「親子と一緒にいなければならない」という必要がなくなることである。

読者の学校では、「安全宣言」を済ませただろうか。今年度の当初に、落ち着いた声で、「先生たちが絶対に君たちを守ります」と宣言しただろうか。余震があっても、「何があっても守ります」と言い続けてきただろうか。自信をもってそれが言えるように、避難訓練のシミュレーション(状況をさまざまに設定した上で、図上で避難方法を考える練習)を行っているだろうか。やみくもに従来の避難訓練を繰り返し、子どものPTSD症状を強めるようなことはしていないと信じたい。

2) 個々の子どもの理解

一人ひとりの子どもが、何を感じ、何を考えたかを想像力豊かに考えたい。被災地から転校して来る子どもや、一番大変な体験をした子どもが、今回の災害で味わった苦悩について、さりげなく知り、そして考える。そこで感じた感覚を自分の中心に置く。今回の災害で子ども一人ひとりが体験したことは、道路一本を隔てただけでもまったく違う。自分がいた場所は被害がなかったとしても、親戚や肉親を失っている子どももいる。災害を契機に転校し、親友と別れた子どもが、何万人も全国各地の学校に散っている。

3) 特別支援教育に学ぶべきこと

被災の有無に関わらず、学校では、例えば、不登校の子どもが登校をしてきたときや、発達に偏

りがあって特別な配慮が必要な子どもをクラスで受け入れたときに近い感覚で、すべての子どもに接してほしい。つまり、その学級で一番大変な子どもの心の状態に合わせた教育環境を意識するのである。特別支援教育の発想にも通じるものである。具体的には、以下のようなことが挙げられる。

- クラスの中で一番辛い思いをしている子どもでも、快適に感じる学級をつくる。
- クラスの一人ひとりが、安心をしていられる場所をつくる。
- 自分の好きなこと、得意なことで教師、仲間とつきあえる場面がある。
- クラスの一人ひとりに活躍の場がある。
- 不安や緊張や怒りや嫌悪などの不快な感情を言葉で表現できる機会がある。
- 家族を支える。
- 教師・仲間を支える。

教師全員でこれらのことに取り組めば、傷ついた子どもに温かく接するという、問題の深刻化を未然に防止するための基本的なかわりが実現する。これができれば、仮に教師の視野からこぼれた子どもがいても、自然に心のケアがなされていくはずである。これが今、わが国の教育に一番必要なことなのである。

傷ついた経験や不安を抱えた子どもたちを支えるには、大きなエネルギーと余裕が必要である。そのために、互いに支え、助け合える学校・学級をつくってほしい。大災害はどの教師にも経験がなく、前例もない。全員が初心者である。だから、教師同士で手を繋ぎ、知恵を出し合い、心を寄せ合い、子どもを温かく包んでもらいたい。

惨事ストレスによって、PTSDを始めさまざまな不適応をかかえて3年以上苦しむ割合は、全体の3分の1に上るとの説もある。被災者が仮に50万人として17万人、義務教育年齢の子どもでは2万人近くが該当する。現状を見渡せば、上述した基本的な知識すら届いていない学校もあり、子どもの心のケアの入り口にすら至っていない。

それほど、目の前の山は高い。しかし、教師は、子どもに日常的に関われる専門家である。教育の中で、この問題を未然に防いでいくことができる大きな存在である。教師・学校には、その立場を最大限生かしていただきたい。願うや、切である。



津波防災劇を通じた防災教育に取り組んで

元大船渡市立綾里小学校校長 りょうり 熊谷 勵 くまがい ほげむ



今回の東日本大震災は東北地方に甚大な被害をもたらし、死者・行方不明者が2万人を超える事態に陥った。特に、岩手県や宮城県には壊滅的な被害を受けた自治体が多く、岩手県沿岸部の市や町、宮城県北部の沿岸地方などは復旧や復興がかなり厳しい状況にある。

震災後に、かつての勤務先や教え子たちの住まいを訪ねたが、無残にも跡形がなく、ここはどこかの道路でこの場所はどこだったのかと、さまよっただけであった。また、強固に造られた防潮堤や防波堤も見ると影がなく、津波の恐ろしさをまざまざと見せつけられた。そして、お世話になった方々や知人などの死亡や行方不明を知り、また、学校訪問で犠牲になった子どもや親を失った子どもの話を聞き、津波に対する防災教育の重要性を再確認し、推進の決意を新たにしました。

津波防災への取り組み

津波防災に取り組んだ理由は二つある。一つ目は、両親からの語り継ぎであり、二つ目は、その地域の歴史である。

最初に取り組んだのは、今から15年前、明治三陸大津波（1896年）から100年目を迎えた平成8年6月である。教頭として着任していた三陸町立越喜来小学校は標高ゼロメートルで、海から約200mの場所に位置していた。歴史をひも解くと、明治と昭和の津波で甚大な被害を受けていた。そこで、当時の4年生と一緒に津波の被害状況や津波が遡上した場所などを調べ、津波の恐ろしさや命の大切さを学んだ。

教員生活最後の大船渡市立綾里小学校では、校長として着任した平成18年度に、津波防災劇「暴れ狂った海」に取り組んだ。この地区は、明治の津波で遡上高38.2mの国内最高を記録し、人口の過半数である1269名の犠牲者を出したという

歴史をもっている。しかし、それにもかかわらず、津波の注意報や警報が発令されても、避難する児童は10%程度で、津波浸水想定区域の住民は皆無に等しかった。こうした現状も、取り組みに拍車をかけた。この状態では、避難訓練を何度繰り返しても、津波の恐ろしさや命の大切さが身につかない。そこで、次のようなねらいで津波防災劇を取り入れたのである。

- 1 本学区は、明治と昭和の津波で壊滅的な被害を受けた地域であることを理解するとともに、それを風化させない態度を養う。
- 2 津波に関する劇を演じることによって、津波の恐ろしさを身をもって体験し、自分の命は自分で守る態度を養う。
- 3 劇を方言で演じることによって、祖父母とのコミュニケーションを図り、後世に伝える態度を養うとともに、地域の防災意識を高揚させる。

「暴れ狂った海」の脚本は、私自身が父母から語り継がれた祖父の体験をもとに、「津波の恐ろしさ」「命の大切さ」「悲しみや生活困窮」「復興」をキーワードとして作成したものである。劇は4場面からなり、6年生全員が秋の学習発表会で地域住民に披露した。また、主題歌も作詞・作曲して、劇の終了後、演じた子どもたちが歌った。

その他にも、次のような取り組みを行ってきた。

- 1 全校児童を対象にした「我が家の安全マップと約束」づくり
- 2 登下校時や在校時の避難訓練と津波体験者による講演
- 3 明治と昭和の大津波被害状況資料の全戸（863戸）配布
- 4 三陸沿岸を襲った過去の津波状況資料の全戸配布

- 5 津波防災看板（明治と昭和の大津波被害状況と避難所）の設置（小学校体育館前と三陸鉄道綾里駅前）
- 6 「暴れ狂った海」の劇をDVD化し、演じた子どもたちや関係機関に配布

津波防災教育への反響

こうした津波防災教育の取り組みは、全国の防災誌や方言の辞典などに取り上げられるようになった。平成23年度より使われている社会科教科書「小学社会5下」にも掲載された。また、国内外の防災関係者の視察を受けたり、新聞やテレビなどで報道されたりもした。

退職後は、「海のフェスティバル」や「津波防災推進フォーラム」などに出演し、「暴れ狂った海」を上演してきた。また、他の市や町の小・中学校でも、脚本やDVDを参考に上演されるようになってきている。

津波災害への備え

今回の東日本大震災で、大船渡市は、被災戸数は他の市町と同等なのに犠牲者が極端に少なかった。これは、住民の避難意識などのソフト面が大きかったのではないと思われる。「暴れ狂った海」を繰り返し上演してきたことや、それが地元

の新聞紙上に連日掲載されてきたことも、住民の意識を動かしてきたのではないだろうか。

震災後は、内陸部の高齢者教室に招かれて講演したり、北海道の中学校から依頼があって、防災劇の脚本やDVDを送付したりしてきた。他の市町村でも防災の意識が高まってきている。現在は、日本ユネスコ協会大船渡支部が全国に向けて発行する「津波指導資料」を執筆中である。今後も、津波の防災や減災に努めていきたい。

最後に、これからのために、次のことをぜひ心がけるようにしてほしいと考える。

- ① 地震と津波はセットで考える。
- ② 常に避難場所を考えておく。
- ③ 遠い場所より近くの高台に避難する。
- ④ 何も持たずにすぐ避難する。
- ⑤ 避難したら戻らない。
- ⑥ 基本的に車は使わずに自分の足で逃げる。
- ⑦ 川のそばほど危険である。
- ⑧ 自分の想定で行動しない。
- ⑨ 第一次避難所で点呼しない。（点呼は高台に避難してから行う）
- ⑩ 保護者が子どもを迎えにきても、警報や注意報が解除されるまで帰さない。
- ⑪ 住居や公共施設は高台に建てる。

※『三陸町史』より

■ 明治三陸大津波 気仙管内の被害状況

町村	被害前戸数	流失	全壊・半壊	被害前人口	死亡・不明	重軽傷
気仙村	137	27	11	1,017	42	41
高田村	14	1	32	111	22	1
米崎村	46	10	11	259	25	5
小友村	121	59	23	778	210	27
広田村	342	154	12	2,092	518	41
末崎村	219	160	13	1,721	676	84
大船渡村	189	65	18	1,433	110	42
赤崎村	393	158	27	3,136	455	105
綾里村	367	271	20	2,251	1,269	57
越喜来	316	125	1	2,395	460	59
吉浜村	87	35	1	1,059	204	16
唐丹村	446	357	7	2,525	1,684	75
合計	2,677	1,427	144	18,787	5,676	553

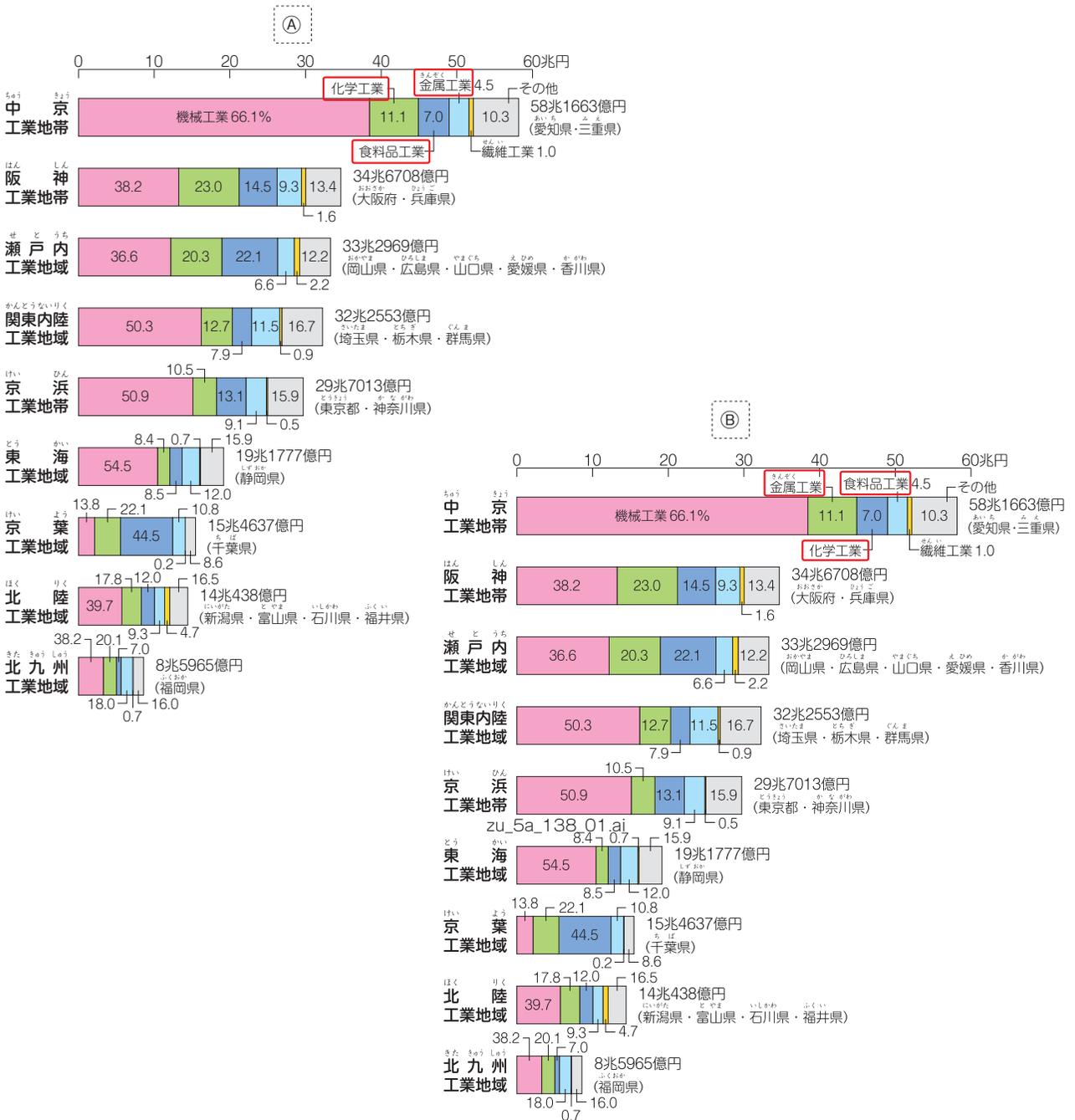
■ 昭和三陸大津波 気仙管内の被害状況

町村	被害前戸数	流失・全壊	被害前人口	死亡・不明	流失・破損船舶
気仙町	718	44	4,272	31	135
高田町	809	3	4,749	3	0
米崎村	442	19	2,566	8	51
小友村	438	37	2,688	18	83
広田村	592	253	4,618	45	488
末崎村	550	130	3,470	36	217
大船渡町	701	374	4,384	2	193
赤崎村	586	118	4,098	83	448
綾里村	507	244	3,469	197	233
越喜来	518	97	3,398	83	133
吉浜村	280	35	1,944	26	108
唐丹村	549	233	3,380	403	202
合計	6,672	1,248	43,036	935	2,290



◆ 平成 23 年度に供給されております教科書につきましては、下記の通りご訂正の上ご指導くださいますようお願い申し上げます。

学年	ページ	行	誤	正
小学社会 3・4 下	p.55	図	布類	衣類
小学社会 5 上	p.138	グラフ	※下図(A)参照	※下図(B)参照
小学社会 6 下	p.26	図	任名	任命





平成23年度小学校教科書準拠・教授用ソフトシリーズ

教育出版の デジタル教科書



小学社会
5~6年

教科書に掲載している写真や絵を大きく映します。
拡大したり動かしたりすることができます。
グラフや統計資料には、適宜、
過去のデータを追加表示できるようにし、
より深い理解が期待できます。

小学国語 ● 1~6年
ひろがる言葉

小学算数 ● 1~6年

小学理科 ● 3~6年
地球となかよし

各 63,000円 (本体+税)

※各教科・各学年ごとのお求めとなります。1~6年, 3~6年, 5~6年をまとめた価格ではありません。



教育出版

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-10
ホームページ <http://www.kyoiku-shuppan.co.jp/>

TEL. 03-3238-6965
FAX. 03-3238-6999



小学社会通信 まなびと [2011年 秋号] 2011年9月30日 発行

編集：教育出版株式会社編集局
印刷：大日本印刷株式会社

発行：教育出版株式会社 代表者：小林一光

発行所：教育出版株式会社

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-10 電話 03-3238-6864 (お問い合わせ)
URL <http://www.kyoiku-shuppan.co.jp>



なかよし宣言

わたしたちをとりまく自然や社会は、科学技術の進展や国際化、情報化、高齢化などによって、今、大きく変わろうとしています。このような社会の変化の中で、人間や地球上のあらゆる命がのびのびと生きていくためには、人や自然を大切にしながら、共に生きていこうとする優しく大きな心をもつことが求められています。

わたしたちは、この理念を「地球となかよし」というコンセプトワードに込め、社会のさまざまな場面で人間の成長に貢献していきます。

- 北海道支社 〒060-0003 札幌市中央区北三条西3-1-44 ヒューリック札幌ビル 6F
TEL: 011-231-3445 FAX: 011-231-3509
- 函館営業所 〒040-0011 函館市本町6-7 函館第一生命ビルディング3F
TEL: 0138-51-0886 FAX: 0138-31-0198
- 東北支社 〒980-0014 仙台市青葉区本町1-14-18 ライオンズプラザ本町ビル 7F
TEL: 022-227-0391 FAX: 022-227-0395
- 中部支社 〒460-0011 名古屋市中区大須4-10-40 カジウラテックスビル 5F
TEL: 052-262-0821 FAX: 052-262-0825
- 関西支社 〒541-0056 大阪市中央区久太郎町1-6-27 ヨシカワビル 7F
TEL: 06-6261-9221 FAX: 06-6261-9401
- 中国支社 〒730-0051 広島市中区大手町3-7-2 あいおいニッセイ同和損保広島大手町ビル 5F
TEL: 082-249-6033 FAX: 082-249-6040
- 四国支社 〒790-0004 松山市大街道3-6-1 岡崎産業ビル 5F
TEL: 089-943-7193 FAX: 089-943-7134
- 九州支社 〒810-0001 福岡市中央区天神2-8-49 ヒューリック福岡ビル 8F
TEL: 092-781-2861 FAX: 092-781-2863
- 沖縄営業所 〒901-0155 那覇市金城3-8-9 一粒ビル 3F
TEL: 098-859-1411 FAX: 098-859-1411